
DOLLS ~ ドールズ ~

そら

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

DOLLS（ドールズ）

【Nコード】

N7008Y

【作者名】

そら

【あらすじ】

久々津町に住む、至って普通の高校生（あ） 青柳俊二（しゅじ）はいつもと変わらない日々を送っていた。

だが、ある日俊二は不思議な声を耳にする。

助けて

この声を頼りに屋上に辿り着いた俊二が目にしたものは血まみれの

少女と武器を持って佇む男だった。

零体目 プロローグ

「いやっ……来ないで！」

目の前には見知らぬ男が武器と思われる鎖鉄球を持って迫ってきている。

なぜ私はここにいいのか、なぜこんな事になっているのか分からない。

ただ意識が覚醒した時には私はここにいた。

「なんで……？」

誰に問いかけるわけでもなく疑問が呟きになって唇から漏れる。

すると、目の前の男が呟きに気付いたのか、反応する。

「なんでって、そんなこと別にお前が知る必要ないんだ……よ！」

言葉が終わると同時に男が軽々と1mはある鉄球を片手で振るう。

鎖が独特の音を響かせ、全て伸びきる頃には鉄球が私の身体まで到達してくる。

それとともに私の身体は重量感と強い衝撃に襲われる。

「うっ……」

轟音と共に私の身体は背後の障害物にがむしゃらに叩きつけられた。ぐにやり、と障害物が私の身体の形に合わせて曲がる音が聞こえる。

「か……はっ」

途端に息が苦しくなってくる。さっきの攻撃で身体が相当なダメージを受けたらしい。

真っ赤な鮮血が雨のように身体から滴り落ちる。段々、意識まで朦朧としてきた。

……なんで私はこんな目にあっているの？ ……何も覚えていないのに。

……何で？

薄れゆく意識の中で誰かに届く事を信じて言葉を紡ぐ。

誰か……誰か……

「助けて……」

一体目 出会い

「はあー」

大きな溜息を対照的な小さな口から放つ。

今は世界史の授業中、老教師の歴史に関するトリビアを聞き流しながら窓際の席から外を眺める。

俺、青柳俊二はここ久々津町に存在する柳林学園に通う普通の高校生。

特に秀でたものは無い。体力、頭脳共に平均レベル。

顔も人並みだとは思う。彼女なんてものはいたことないけど。

まあ、変わったところがあるとするれば、

両親が俺が小さい頃に事故で他界して、今は俺一人で両親の残してくれたお金と家で生活している。

今時には珍しい家が隣同士で幼少時からの幼馴染がいること。

それと今、俺の隣の席で教室の半数には聞こえるであろう大きないびきをかいているこいつ、柿本夕と友人ということだ。

だけど俺が変わってるわけじゃなくてこいつが変わってるだけなんだけど、まあそれは後で追々話す事にする。

なんて、余りの暇さに誰が聞くでもないが長々と自己紹介をしてみよう。もちろん心の中だけだ。

それでは今日はここまで

お、ちょうど授業も終わったみたいだ。老教師が荷物をまとめて教室から出て行く。

さて俺も飯の準備……の前に隣のうるさい奴を叩き起こさないとな。

クラスにも俺にも騒音が迷惑になって仕方がない。

「おい、こら起きろ」

さつきの宣言通り、振り上げた手を勢いよく脳天に合わせて叩き落とす。

鈍い音が辺りに響き、じんわりとした痛みが俺の手に響く。
少しやりすぎたかもしれない……

「まあいいか。夕だし」

「よくないよ！ 痛いよ！ しかも夕だしって何！？」

起きぬけから元気な奴だな、寝てたと思ったらいきなり飛び起きたよ。

そしてどうやらさつきの呟きは心の中だけに留めておいたはずなんだが声に出していたらしい。

「気にするな、ただの本音だ」

「ヒドイ！ ヒドイよ！ せめてもう少しオブラートに包んで！」

うるさい奴だな、我が友人ながら鬱陶しく感じてきた。

まあ今のは冗談のつもりだったんだが、こいつは寝起きなので本気に捉えているみたいだな。

これ以上長引かせると昼飯の時間が無くなってしまっ、そろそろ終わらせるか。

「ねえ！ さつきの言葉嘘だよ！ 僕たち親友だよ！」

「うるさい、落ち着けさつきの冗談だ。さつさと飯食うぞ」

「あ……なんだ冗談かビックリした〜まあ僕と俊二の仲だもんね。

そんな事あるわけがない！ 学食でパン買ってくるから待つて

て！」

僕以外の奴と食べるなよ」と反吐がでそうなセリフを笑顔で吐いて夕は教室から出て行く。

……一人になって初めて気づく。クラスメイト、特に女子からの変な視線が怖い。

くそ、あいつ帰ってきたら全力で無視してやる。

「さて、どうするか？」

夕を全力無視しながら昼飯の時間を堪能し、教室から出てくる。

後方の教室付近から聞き覚えのあるような謝る声が聞こえる気がするのは

満腹になって眠くなったことによる幻聴だろう。きっとそうだ。

当てもなくふらつくかなーと残りの昼休みをどう有効活用するか考えていると

助けて

「!？」

なんだ!？ 今の! 脳に直接語りかけてくるような感覚。

辺りを見回してみるが、俺の近くに人はいないし、さっきまでいた気配もない。

じゃあ今のは一体誰が!？ ああっ駄目だ! 頭が混乱して思考が働いてくれない。

まずは落ち着け!……考えるのはそれからしよう。

落ち着くためには深呼吸だ。息を吸い込み小さく吐きだす。

「ふうっ、落ち着くまではいかなくても気休め程度にはなったか？」

さて、さっきの声？ について考えてみるか。

とは言っても情報なんてものはさっきの奴しかないんだけど。

この際誰が言ったかなんて関係ない。何処から聞こえてきたかが重要だ。

場所が分かれば声の主もそこにいるはずだから。

……………

「だが、分かん」

当たり前だ。俺はどこぞの天才探偵でもないし、ましてや超能力者でもあるまいし。

一端の学生の俺には色々と無理がある問題だ。

少し気になるが分からないものは仕方がない。諦めて教室にでも戻って昼寝するか。

そう思つて教室の方向へ踵を返そうとした瞬間。

「ねえねえ、さっき屋上で何か変な音しなかった？」

「ん？ 何か、工事でもやってるんじゃない？」

「そっかー、まあ別にいつか。それでね……………」

ふむ、屋上か……………行つてみる価値はあるな。

これで駄目なら諦めよう。これが吉と出るか凶と出るか……………少し楽しみだ。

屋上への階段を駆け上がる度に気持ちも弾む。

何かありそうな予感がする。子供の頃に戻つた気分になる。

案外俺も子供なのかもしれない。

二体目 覚醒

目の前には錆びついた重量感溢れる鉄の扉。

すなわち屋上と校内の境界線。その前に俺は立っている。

しかし、向こう側からは何も聞こえてこない。やっぱり間違いだったのか。

まあ、確認だけでもしておくかな。

そう思い、ずいぶん古めかしいドアノブを捻る。

錆びついて重くなった扉が音と共に開いていく。

人間誰しも非日常の場面に遭遇した時には、

一瞬思考が停止して決められたテンプレート通りの言葉を出す筈だ。

「何……これ」とか「どういうこと？」なんてそんな感じの言葉を。

「何だよ……これ」

そういう俺もその一人。

扉を開くと、そこには……ありえない光景があった。

それは一言で表すなら「地獄絵図」

コンクリートで出来ている筈の地面は所々が重機を使ったかのように砕かれ、

転落防止用のフェンスは一部だけだがその姿をあり得ない姿に変えている。

極めつけは辺り一面血の海。

そしてその血液の根源であろう人物が自分の身体の形通りに歪んだフェンスに礫状態にされていた。

しかも、その人物は身体の大きさなどから見ても明らかに少女にし

が見えない。

「……………」

あまりの残虐さに思わず目を逸らしてしまつ。

一体この光景は何なんだよ！

なんでこんなことが普通の高校の屋上で起こってるんだ…。

「んだよ、誰か来たのかよ？」

「!？」

いきなり屋上の奥の方から声が聞こえる。

恐る恐る扉を盾に覗いてみると。

さつきは扉が死角になって見えなかったがどうやら人がいるようだ。

「おい！　そこにいんだろ！　出てこいよ！　出て来ねーなら……
殺すぞ」

ヤバい！　本能がそう訴えてくる。

だが、恐怖で身体がすくんで動かない。でも出て行かないと……。

「……………」

無言で身体を露見させる。心臓の鼓動が尋常じゃない早さで刻まれていく。

そこにいたのは、銀髪で長身の少し痩せ形で、年齢も俺と大して変わらないぐらいに見える男がいた。

ただ一つ、決定的に違っていたのは自分の身長のは半分はあろうかという1m程の鎖が付いた巨大な鉄球を手に持っていた事だ。

しかも服が返り血を浴びている。恐らく……いや確実にこの男が少

女をやったに違いない。

「お前が……やったのか？」

少女の方を向いて男に問いかけてみる。

「ああ。それがどうかしたのかよ？ お前もあんな風になりたいのか？」

そう言っつて鉄球をまるで風船を持ち上げるかのように軽々と片手で持ち上げる。

一体どういう原理だったらあんな事が可能になるんだよ……。

「どうして、あんな小さな女の子をあそこまでする必要があつたんだ？」

「んだよお前……んなことはお前には関係ないことだ。あまり詮索が過ぎると……死ぬぞ」

狂気に満ちた眼でこつちを睨んでくる。どうやら冗談ではなさそうだ……。

だけど……

「確かに関係はないかもしれないが、この状況を見過ごせるほど出来た人間じゃないんでね」

「いいのかお前？ さっきの言葉俺への挑戦と受け取るぞ？」

口調はさっきまでと変わりないが、明らかに自分の身体が震えているのが分かる。

今なら、泣いて土下座でもして許しを請えば、助かるかもしれない。

でも、例え死ぬとしても、意味がなかったとしても、『あの少女を助けたい』、そう思ったんだ。

それに、これはあくまで俺の推測……というかほとんど想像に近いんだけど、さつき校内で聞いた声。

あれはこの娘が言った言葉じゃないかと思っている。

だったら期待には添えないかもしれないけど、俺は目の前の男に立ち向かってみようと思った。

だから……持てる限りの勇気を持って

「好きにしる」

自分で決戦の火蓋を切り落とす。

「いい返事だ。覚悟……しとけよ」

割れる地面。舞い散る砂埃。飛び交う鉄球。

そんな状況の中、なんとか俺は生きていた。

いや、実際には生かされていると言った方が正しいかもしれない。明らかにあの男は攻撃をわざと外してきてる。自分が楽しむ為に。

「おいおい！ さつきまでの威勢はどこいったんだよ？

逃げてるだけじゃ俺は殺せないぜ、さっさと反撃してみな！」

地面が揺れると同時に俺の身体スレスレに鉄球が叩きつけられる。

「うわっ！」

こいつはさつきからこうやって紙一重の所で攻撃を外してくる。

ただ、無傷で済んでいるかといえばそんな事はない。

「はあはあ……はあ」

地を砕く程の威力だから当然砕けた破片が飛ぶ。

それが身体に突き刺さり、じわじわと痛みが体中に広がる。

それとともに体力もどんどん削られる。

精神的疲労も大きいな。いつ攻撃が当たるか分からない中ただ逃げ惑う。

今の俺の状態は言つなれば満身創痍。

正直、力量がありすぎた。一度も攻撃にまわることができない。

しかもあいつあんな鉄球振りまわして、息一つ切らしてねえ。

ホントに同じ人間なのかよ？

それにもう一つ疑問が

「なんで……こんなことになってるのに俺以外に誰もここに来ないんだよ」

そうなぜかいくら地面が砕けようと轟音がしようとして全く人が来る気配がしない。

「それはな、俺らの能力みたいなものだ。聞きたいことはそれだけか？

だったら……そろそろ飽きてきたな。……おい、今から殺すわ」

淡々と殺人予告をした男が鉄球に触れる。

すると、鉄球がみるみる間に膨らんでいく。

おいおい、冗談だろ……なんだあのバカでかい鉄球は。

3m超に膨れ上がった鉄球を引きずりながらこっちへと走ってくる。

鉄球が引きずられる度に地面が抉り取られていく。
今までののは完全にお遊びだったってことか……

あーなんかかつこ悪いな俺。

最初だけカツコつけてあの娘守る、みたいなこと言ってさ。

いざ戦いになるとただただビビって逃げるだけ。

だったら最初からそんなこと言うなって言いたいよな、数十分前の俺に。

あいつ倒せなくてもせめて、あの娘だけは助けたかったな。

隣のフェンスで未だに意識を失くしている少女に向かって謝る。

「ごめんな、偉そうに助けるとか言っつて。ホントは助けたかったんだけど。」

俺の完全な力不足で……だから罪滅ぼしって訳じゃないけどさ……
…君を一人では逝かせない。俺も一緒に……」

謝罪の途中から涙で視界が滲む。死ぬことに対してというよりは少女を守れなかった事に対してだ。

俺に力があれば……この娘を助けることが出来たかもしれない。でもそんな漫画みたいなことはそうそう無い。

だから、もう一度。今度は少女の頬を両手で包みこみ、面と向かって

「ごめんな……」

涙で歪んだ顔で謝罪する。

「おい、もうお涙頂戴の展開は終わりか？ 待ってやった俺に感謝しろよ」

男が腕を思い切り振りかぶると腕に巻きつけられた鎖が伸びる。

「だが、俺はここで見逃す程甘くはない。仲良くそのガキと死にな
！」

そのまま腕を振り下ろすと鉄球が宙を舞って俺たちの頭上に降って
くる。

ああ、ここで終わりか……。

ドクンッ！ ドクンッ！

！！

なんだ！？ 変な感覚が身体を支配してくる。

身体が熱い。だが、不思議と感覚が研ぎ澄まされる。

周りの風景が止まったように見える。まるで世界が停止したかのよ
うに。

「これもあいつの能力なのか？」

そう思っつて男の方をしてみるも男も停止している。じゃあ一体だれ
が？

いや、今は考えるのはやめよう。

それよりさっきから頭に変な知識が流れ込んでくる。

戦いの知識、何かの能力についての知識。

これは俺の能力……なのか？

流れ込んでくる知識を元に推測する。

仮にこの能力が俺の物だとしたら、もしかしたら……少女を助けら
れるかもしれない！

流れてきた知識によるとこの今の停止状態。これもどうやら俺の能

力の一つらしい。

これは時間の流れを極端に遅くしているらしい。ようするに停止というよりは超スローモーションの状態ということだ。

ただし、このスローモーション状態、一分しか持たないみたいだ。

既にこの状態になって30秒は経っている。

だったら残りの時間でまずはこの娘を安全な場所に。フェンスから少女を助け出し優しく抱き抱える。

もう一度だけ最後の謝罪をする。

「助けるのが遅くなってゴメンな。でも今度は絶対に助ける。約束する」

そう言っただけで地面を蹴る。すると身体が風のように軽く風のように速く移動する。

これが俺の能力の、身体能力と感覚の一時飛躍的上昇だ。少女を屋上の離れた隅の方に寝かせる。

「すぐ終わらせてくるから、待ってる」

そう言い残し、地面を蹴ってさながら瞬間移動のように男の元へ向かう。

轟音が響く。時間が来てスローモーションが切れたようだ。男は今となっては到底的外れの場所に鉄球を叩きつける。

「ふんっ、俺に刃向かうからこういう事になるんだよ」

満足げに呟く男の背中に向かって言ってやる。

「それは誰に向かって言ってるんだ？」

男がビクツと一瞬身体を震わせこちらを向く。

「なっ!?! どういうことだ!?! お前は確かにあのガキと一緒に殺したはず……」

「ああ、俺もそのつもりだったんだが何故かこうして生きている。もちろんあの娘もだ」

「……………なるほどな、そういうことか。」
「何がだ？」

男は一人納得したように呟く。

「お前には関係ねえよ。ただし、こうなった以上お前も完全に生かしておけなくなった」

「どういうことだ? ……うっ!」

急に身体が物凄い衝撃に襲われる。

鉄球が身体全体を覆うようにのしかかる。

「うああああ!!」

そのまま思い切り屋上の向こう端まで吹き飛ばされ、壁に身体が叩きつけられた。

「ぐあっ! はあああ、今のは一体……」

痛みが残る身体を引きずって立ち上がる。

能力のおかげでなんとか生きているが無かったら確実に死んでいた。しかも能力があったとはいえ無防備だったところを突かれた。

それだけ今回は本気ということか。

「考え事なんてしてるとあっという間に死ぬぞ」
「！！」

耳元で奴の声が響く。反射的に足を前に蹴りだす。

鉄球は俺の身体がさつきまであった所をすりぬけフェンスに直撃した。

グシャァ！、フェンスが歪むどころか突き破られている。
奴の身体能力もさつきより格段に向上している！？

確実に力は増し、移動力も俺と同じくらいになっている。

けど、俺もいつまでもやられてるわけにはいかない。

まずはあえて奴との距離を縮める。鎖しかない部分に潜り込めば、一発お見舞いしてやれる。

この勝負、お互いに一発で決まるに違いない。

俺はさっきの一撃がかなり負担になってる。

それに奴も本気を出してからか目に見えるほどに疲れてきている。
先に当てた方の勝ちだ。

「ふうー」

息を吐いて落ち着く。

奴もそれが分かっているのか動きを止めて息を整えている。

お互いに体制が整ったのか相手を睨みつける。

ここからはスピード勝負。どちらがより速く攻撃に転じるか。

.....

額に汗が滲む。どれくらい経っただろう。

まだ1分ぐらいしか経っていないだろうにもう数分たったように感じる。

刹那

視界から奴の姿が消えた。

「しまった！ 出遅れた！」

急いで地を蹴る。身体が前に思い切り進む。

しかし、既に目の前には黒い鉄の塊が押し寄せていた。

「これで、終わりだな！ 死ね！」

また守れないのか？ いや今度は絶対に守るって約束した。

「俺は……負けられない」

右足を軸に横へ方向転換して左足を思い切り蹴り出す。

鉄球はそのまま空を切り鎖は虚空へと伸び続ける。

「なんだと！？ あの距離でこの攻撃を避けただと！？」

さらに方向転換。今度は奴に向かって。

地面を蹴る。何度も何度も。速く、もっと速く。

身体を捻り、拳を後ろに引き戻す。

「これで決まりだ！」

走り続けたままスピードを落とさずに拳を振るう。

拳が何かにぶつかる感触。そのまま腕を目一杯伸ばす。

風を切る音とともに奴の身体は皮肉にも自分が少女を叩きつけたフ

エンスへと叩きつけられる。

「ぐっ！ くそがあ！ やるじゃねえかよ……はあはあ」
「はあ……はあ」

返事をしようにも疲れきって言葉が出せない。
お互いに、そのままの状態で息を整える。
しばらくして、落ち着いたのか男が

「おい、お前。名前教えてろ」

と礼儀も何も関係無しに名前を聞いてくる。

「……青柳俊二だ。お前は？」

「銀だ。今回は俺の負けだが、次はこうはいかねえ」

そう言うと銀と名乗った男はそのまま自分でフェンスから抜け出し
屋上から飛び降りた。
普通なら驚くところだろうけどさっきあんな死闘をした後だ。あいつ
があれぐらいで死ぬはずない。

「はあーやっと終わった。身体中が痛え」

力を使い果たし今は只の高校生に戻った俺は、ふと少女のことを思い出す。

「あ、そういえばあの娘大丈夫か！？ 病院とか連れて行かないと
！」

「あ、あのー……」

「ってよく考えたら俺も怪我してるし！ って……ん？」

「あ、あのー大丈夫ですか？」

声のする方へ振り返ると……あの少女がいた。しかも無傷で。

改めて見てみるととても整った顔立ちをしている。

子供らしく二つに結った髪、雪のように綺麗な肌、もじもじとさせている指も細くしなやかだ。

ってそんなことより！

「なんで君、無傷なの！？ さっきまで瀕死の重傷だったはず！」

「あ、はい。そうだったんですけど、私回復の能力があるんです。

だから意識を取り戻してからはずっと治癒してました」

ほら。と言って俺の傷口に手をかざす。するとみるみる内に傷がふさがっていく。

「おおっ！！ すげえって、そういえば何で君こんな所にいたの？」

兼ねてからの疑問を少女に対してぶつけてみる。

「それが……私記憶が全くないんです。今までの。残っている記憶は能力の使い方だけで」

返って来た返答は予想を遥かに超えていた。

「え！？ 何も？ 全く？」

「はい、名前すら……」

それはまた難儀な……。とここで重要な事に気づく。

「あれ？ つてことはもしかして帰る家も……」
「はいい……」

今にも泣きそうな声で返答する少女。これは大変だな……
あいつに頼んでみるか？

いやでもこの娘連れてつたら、見た目まだ中学生だから確実に変な
眼で見られるよな……

「うーん」

必死にこの娘をどうするか考える。

夕の所は？ ……いや駄目だあいつにだけは任せられない。

ちらつと少女の方へ目を追いやると涙目でこつちを見つめていた。

くっ！ あんな目で見られたら……仕方がない。最終手段を使うか。

「なあ」

「は、はい？ なんででしょうか？」

「もし、もしもよかったらだ。俺の家に来ないか？」

「ふえっ？」

「俺さ一人暮らしだから他に誰もいないし、俺も全然構わないから
さ」

「ホントに……ホントにいいんですか？」

「ああ、構わない」

「ふええっ！！ ありがとうございますー！！」

遂に涙が溢れてしまった少女はそのまま俺の所へと飛びついてきた。

「のわあっ！」

やれやれ、これから騒がしくなりそうだ……

そう言いつつも俺の顔は綻んでいた。

三体目 一夜明けて

「んっ……」

部屋の窓から差し込む日差しを身体に受け目覚める。
目覚めるまではよかった。

突如、体中に針が刺さるような鋭い痛みを感じる。

「っ……！」

叫びたくなる気持ちを必死で抑え……ようとしたが。

「いつ、痛ってええー！！」

結局、痛みを堪え切れずに朝っぱらから近所迷惑な叫び声を上げる
ことになった。

「ど、どうしましたー！？ 俊二さん！」

俺の叫び声を聞いたのか件の少女が、こっちがどうしたと聞きたく
なるほどの

騒音をあげながら、部屋へと走ってくる。

「お、落ち着け！ 俺はとりあえず大丈夫だ！」

このままだと向こうの方が酷い事になりそうな危機感を感じ、急い
で自分の無事を知らせる。

「へ？ 大丈夫なんですか？ ……はあーびっくりしました。

俊二さんの身に何かあったのかと思って私……」

「さつきも言ったが大丈夫だ。心配するほどの事じゃない。……ほ、本当だ！ とりあえず涙目やめろ！」

涙目の少女を全力で宥める。女子の涙はいつみても苦手だ……。

……でも、こいつも俺の事を本気で心配してくれている。それは今のこいつの姿を見れば一目瞭然だ。

今さつき起きたと言わんばかりの爆発した髪型、なぜか身体に擦り傷が出来ている。多分さつきの騒音はこのせいだろう。

まあそれも急いできてくれた証拠だ。息も切れ切れだし。原因があまり大した事ないだけに少し悪い事をした気分になる。

……なるんだが。

「なあ……一つ聞いてもいいか？」

頭を抱えたくなる気持ちを必死に堪え、びくびく動くこめかみに手を当て問いかける。

「ふえっ！？ なんですか？」

一方原因の方はなぜ、質問などされるのかといった感じでこつちをまじまじと見つめてくる。

正直、今その行為はとてつもなくやめてもらいたいんだが……

「お前はその……世間一般で言う裸族……という奴なのか？」

直接的な表現を避け、間接的に自分に出来る最高の伝え方をする。
が、しかし

「……？ ら…ぞく…ってなんですか？ 何かの能力ですか？」

ああーそっか……こいつ今記憶飛んでるから何も覚えてないんだっけか。

でも普通の記憶喪失は、記憶だけ飛んで知識は残ってるはずなんだけど。

まあさすがに最低限の知識はあるみたいだ。

でも戦いの能力に関する事ばかり覚えてるってのも変な話だよな実際。

まあまず、能力って言葉が当たり前になりそうな俺が一番変だけだな！

このままいくと疑問が尽きなさそうだったため無理やり考えを終わらせて、少女の質問の答えを教えてやる。

「えー、まああれだな。答え聞く前に一回鏡かどっかで自分の身体見てこい。

それでも分かんなかったら教えてやる」

「？ はあ……分かりました…。いつてきます」

あまり納得していない様子でとぼとぼと部屋を出て行く。

まあ、さすがにあれで気づくだろう。てかさっちの方がいい。

俺の口から答えを聞かせるよりよっぽどマシだ。

さて、これからあいつには世間の常識というものをきちんと教えてやらないとな。

はあ……少しだけ子を持つ親の心が分かった気がする。

と、いつちよ前に悟ったような事を言ってみる。

本日2度目の近所迷惑が起くるのはそれからすぐだった。

少女と共に朝食をとる。聞きたいことは色々あるがとりあえず今は無理そうだ。

「……………うう、恥ずかしくて死にたいです…」

顔をトマトの様に真っ赤に赤面させ、涙目で俯く少女。

原因は言わずもがなさっきのあれだ。

ちなみに今は俺のTシャツを着せている。大きすぎてかなりブカブカだ。

「昨日来てた服はどうしたんだ？」

あえて、直接連想させるようなことはないよう言葉を選んで会話する。

「あれは……………もうボロボロだったし、血で汚れてたので…」

「そっか……………」

少女はさっきとは表情を一変させ少し、暗く陰った表情になる。

そう、思い起こせばつい昨日俺は銀と名乗る男と命を賭けた戦いを繰り広げた。

そこで少女はその銀に殺される寸前だった。思い出したくもないだろう。

嫌な記憶を蘇らせてしまったかもしれない。

「ごめんな……………もう忘れたいよな」

「い、いえいえ！ 俊二さんが助けてくれたので全然気にしてませ

ん！」

あんなことがあったのにもう笑顔で笑い飛ばせるほどになっている。強い娘だ。……例えそれが彼女の空元気だったとしても。

なんとかかしてやりたいな……この娘にはもっと笑顔でいてほしい。笑顔がよく似合う女の子だ。これからの人生は幸せにしてあげたい。なにか俺に出来る事は……

そうだ！

「おい！」

「え？ なんですか？」

朝食のベーコンエッグを何故かナイフとフォークで綺麗に切り分けてとても美味しそうに食べている少女。

なんだその食べ方は、てか何でナイフとフォークの使い方は知っているんだ……

……それよりナイフとフォークどっから持ってきた。俺ですらある場所知らんのに。

まあ、今はその事は置いておこう。そんな事よりもっと大事な事がある。

「お前の名前を決めないか？」

「名前……ですか？」

「ああ、そうだ。無いと色々と不便だろ。俺も呼び方に困るし」

「はい……それは確かにそうですね」

「問題無いか？ 名前は俺とお前で考えるんだけど」

「ふふっ！ はいっ！ 大丈夫です！」

「どうした？ そんなに嬉しいのか？」

「いえ……何か俊二さん、お父さんみたいだなって」

「なっ！ ……んっ、それじゃ名前決めるぞ」

「はい！」

さっきの笑顔は反則だろ。ますますこの娘を喜ばせたくなくなった。

やっぱり世のお父さんはこんな気持ちなのか？

だとしたら父親も悪くないな。

「それで名前だがどんなのがいい？」

自分の名前を自分で考えさせるという前代未聞のやり方で決めにかかると。

実際は中々いい案が浮かばず俺がこの娘に丸投げしたというのが正しい。

さすがに少女もこの無茶ぶりには顔をしかめ、

「うーん、私は自分では決められないです。やっぱり名前は他の誰かに付けてもらいたいです。」

だから、俊二さん。私の勝手なわがままで申し訳ないんですけど、名前決めてくれませんか？」

そこまで、そこまで真剣にお願いされたら断るわけにはいかないな。

「よし、わかった。実は最初からお前見ててこれいいなって思った名前あるんだよ」

「えっ！ 何ですか！？ すごい聞きたいです！」

そこまで食いつかれるとは思わなかった……

もう少し気楽に聞いてほしいんだけどな。

「あんまり期待すんなよ。嫌だったら嫌って言っていいからな」
「わかりました」

「お前さ、小さくて可愛い感じが鈴に似てるから」鈴すず「ってどうだ？ あんま自信ないんだけど」

「鈴……鈴、鈴、私は鈴。……いいですね！私気に入りました！」

「そ、そうか、ならよかった。……ってことでこれからよろしくな鈴」

「はい！ こちらこそ宜しくお願いします！ 俊二さん」

ふう、名前も無事に決まってよかった。

鈴も喜んでるみたいだしひとまずは成功か。

これで一つ目の計画が完了。さて次の計画に移るか。

**

朝食も食べ終わり部屋でくつろぐ。

鈴は後片付けをしてきている。俺がやるからいいって言ったのに

「いえいえ！ こうして普通の生活を出来ているのは俊二さんのおかげですから

それに名前までもらって……恩返しの意味も込めてこれぐらいはやらせてください！」

って真剣に言ってくるもんだから、とりあえず食器の後片付けのやり方を教えて任せてきた。

少し心配だが今のところ食器の割れる音は聞こえてこないので大丈夫だろう。

「鈴か……」

突然の出会いを経て、今では家族の一員となった少女の名前をぼそりと呟く。

昨日あの後、俺は鈴と共に文字通り逃げるように屋上を出た。途中で、教室によって鈴を俺の体操服に着替えさせる。

さすがにあの血まみれの服じゃ補導されかねなかったからな。

学校を出て街中に出るとあんなことがあったのに誰もそんなことには気づかずに普通の日常を送っていた。

あれも銀が言ってた「俺達有能力」って奴のせいだったんだろう。

銀……と名乗る男。あいつとはまた会いそうな気がする。

それに仲間もいるみたいだな。ただ、あいつの目的が分からない。鈴が狙いなのは昨日の事で分かっているが、何故鈴を狙うのか、そこが分からない。

まあ、今は聞く相手もないことだし、このことはここまでにしておくか。

「ん？」

携帯が無機質な音楽を流しメールの受信を知らせる。

夕か？ こんな朝っぱらから迷惑な奴だ。まったく……

そんなことを思い、携帯を開き新着受信メールの所を確認する。

しかし、送信者はある意味、夕より面倒な相手だった。

「今からそつち行くから」

必要最低限の言葉だけ伝えるメール。

隣りに住む幼馴染、五十嵐咲からだ。

どうやら今から来るらしい。何かの用事か？
ま、とりあえず最低限の準備だけしとくか……

「俊二さん、後片付け終わりましたー」

……あ、鈴がいるの忘れてた。どうする？ 鈴を見られるわけには
いかない。

けど、咲の奴が来るまでもう本当に時間がない！

「俊二さん？ どうかしたんですか？」

「鈴……えーとだな……俊二ー？ 来たわよー」

「来た、やばい！ 鈴とりあえずここ隠れる！」

「ふえ？ ……きゃっ！ 俊二さん！？ 何するんですか！？」

「すまん、しばらくそこで居てくれ。俺が来るまでそこから出るな
よ？」

「えっ？ ちょっと俊二さ……」

後ろから鈴の声が聞こえるが部屋を出る。鈴すまん。
すぐ終わらせるから待っててくれ。

そう心の中で懺悔して俺は玄関へと向かった。

サラリとした長い黒髪に、人形のような顔立ち。

服から溢れんばかりの胸、高身長のスカーツから覗くすらりと伸び
た長い脚。

これだけなら誰もが振り返る美少女だろう。ただし……

「あんた、女の子連れ込んでるでしょ」

扉を開くなり、開口一番でこんな事を言ってくるおまけ付きだけだな。

「咲、お前……いきなりなんだよ！ てか、なんでそうなるんだよ？」

「瞬ギクツとはしたものの、ここで動揺したら確実に怪しまれると思っ少し強く反論する。」

「ふんっ、その反応がすでに駄目ね。普通ならもっとな冷静に対応するはずよ。」

「……身に覚えがないならね」

「いや、この場合の普通の対応ってなんだよ！ むしろこっちの対応の方が普通だろ」

「なんでそう思うの？」

「誰でもいきなり女連れ込んどるか聞かれたらそうなるだろうよ」

「じゃあ、絶対ないって断言できる？ もし嘘だったらどうするの？」

「ああ。嘘だったらお前の言う事何でも聞いてやるよ」

ふん。と全く関心のない返事をする咲。

こいつ、絶対俺の話聞いてねえな……もう俺の事は無視して家の中観察してるし。

すると、しばらく玄関から家の様子を観察していた咲が急に

「俊二がそこまで言うなら信じてあげる。……だから最後に一つ聞いていい？」

「なんだよ？」

「さっきから、というより私が来た時からずっとこっち見てるあの

娘は誰？」

「…………え？」

言われて恐る恐る後ろを振り返ってみると

「あつ…………」

「鈴…………お前」

堂々と、もう隠れるどころか完全に身体が見えていた。

何やってんだよ……………思いつきバレてんじゃないか。

しかも、隠れてるって言ったのに最初から見てたのかよ……………

「さて、もちろん説明してくれるんでしょうね？」

「い、いや……………はは」

「し・て・く・れ・る・ん・で・し・よ・う・ね・？」

「…………はい」

はあ、まさか咲にバレるとは。

これは夕にバレるのも時間の問題だな……………

四体目 初めての日常

「最初に言っておくわ、下手な隠しことや嘘はやめてね」

ただいまリビングで話し合い中。いや話し合いというよりはむしろ詰問かもしれない。

テーブルを挟んで俺と鈴、向こう側に咲が座っている。

そしてその咲から、どんな嘘で切り抜けようかと思えばいきなり禁止令が出てきた。

仕方ない、ここは無理やりにも嘘で切り抜けるしか……

「いや実はこいつ、家の親戚の娘でさ……」

「あんた、親戚との付き合いないでしょ」

「……」
「す、すまん間違えた。俺の古い知り合いの娘さんだった……」

「あんた昔から友達は夕しかいないでしょ」

「……」
「あ、ああそうだ！ 思い出した！ 昨日いきなり見知らぬおっさんに娘を頼むって……」

「……ねえ俊二、何があつたのか深くは聞かない。だから少しでいいからお願い」

そういう咲の顔はかなり真剣だ。

まったく、いつもはキツイことばっか言ってくるのにこつこついう時だけ優しいんだよな。

まあ、それがこいつの良い所なんだけどさ。

「……はあ、わかったよ。負けた。ただし、詳しくは話せないぞ。何せ俺でもほとんど理解できてないからな」

「大丈夫よ、私だってそんなに他人のプライベートには踏み込まないわよ。例え俊二がロリコンだったとしても」

「おい、何か勘違いしてないか？」

「そんなことないと思うけど？」

「もういい。んじゃ説明するぞ……」

「……それホント？」

「明らかに嘘に聞こえるかもしれないが全て本当の話だ。なんなら鈴に聞いてみるか？」

説明し終えて咲の一言。まあそりゃ当り前だ。

この反応以外の反応をする人間はかなり少数派に違いない。まだバカバカしいと笑わなかっただけマシか。

「え、えと咲さん……でいいですよね？」

今までずっと黙って話を聞いていた鈴がおずおずと手を上げて発言する。

「ええ、そうよ鈴ちゃん」

対する咲はハキハキと鈴に対して返事する。

こいつには初対面同士の人間に産まれるあの独特の空気がないのか。

「あの、さつき俊二さんも言いましたがこの事は全部本当です。信じてください！」

「そ、そんなに頭下げなくても大丈夫よ！ちゃんと信じるから！」

「ホント……ですか？」

「うっ」

でたよ、鈴必殺の涙目上目遣い攻撃。名前には突っ込むな。俺も何回かやられたけどあれ、そうとう来るんだよな。なんか、心に直接くるみたいな。

ちなみに言っておくが決して俺がロリコンとかそういうんじゃないからな。

あの様子だと咲も落ちたな。恐らく。

「俊二」

「何だよ？」

「さっき言った事全部信じるから……」

「信じるから？」

「信じるから、鈴ちゃんを私に頂戴」

「帰れ」

この展開、来るとは思っていたがホントに来るとは……鈴、なかなか恐ろしい女だな。

「ふえっ！ 私、咲さんに貰われるんですか？ でもそれで信じてもらえるなら……」

「いやいや、冗談だから！ 落ち着けて」

「ねえ、俊二。鈴ちゃんを……」

「お前は少し黙ってる」

駄目だ、なんだこの酷い状況は。鈴は勘違いしてるし、咲は完全に我を失ってる。

誰か、なんとかしてくれ……俺には無理だ。

その後、この状況は10分間続いた

「よし、落ち着いたか？」

「はい、落ち着きました……」

「ええ……落ち着いたわ」

やっと混沌とした状況から脱することが出来た……誰か俺を褒めてくれ。

あの状況からここまで持ち直すのにかなりの労力と精神力を労したんだよ。

さて、やっと元に戻った事だし話も元に戻すか。

「話を元に戻すぞ。咲、お前はちゃんと話を信じてくれたのか？」

「失礼ねいくら取り乱していたとはいえちゃんと信じてるわよ」

「そうか、ならいいんだが」

ちなみに、咲には昨日学校の屋上で出会った事と鈴が記憶喪失ということしか話してない。

「ねえ、真面目な話になるけど鈴ちゃんの事……警察に届けたりしなくていいの？」

咲が至極まともな意見を言ってくる。

確かに普通なら記憶喪失の少女なんて学生の手には負えるわけがないからな。

ただ、今の状況で鈴を俺の元から離すわけにはいかない。また狙わ

れたら助けることが出来なくなる。

「ああ、そのことか……それも考えたけど、警察に届けた所でどうせ施設送りになるだけだろうからな」

「ただ、鈴がどうしてもって言うなら……」

そういつて鈴の方に向き直ると、目一杯に涙を溜めこんで首をふるふると横に振った。

「私、嫌です……俊二さんと離れるのは……」

「ああ、分かっているよ。ごめん、言ってみただけだ」

慰めるために鈴の傍まで行って優しく頭を撫でてやる。

すると、さっきまで今にも泣きそうな顔をしていたのに途端に笑顔に早変わりした。

その光景を見ていた咲が呟く。

「全く、あんた達まるで親子ね。さっきの提案は取り消すわ。ただし、俊二あんたちゃんと鈴ちゃんの面倒見なさいよ」

「私だつて出来る限りの事は手伝うから」

「悪いな、咲。助かるよ」

「べ、別に鈴ちゃんの為に手伝うだけよ！」

何故かお礼を言つと真つ赤に赤面してしまった。何かいけなかったんだろうか？

まあ、いいかそれに咲には早速手伝ってもらいたいこともあるしな。

「なあ、咲」

「なによ？」

「早速で悪いんだが手伝つてくれないか？」

「何を？」

「鈴の衣類全般の買い物だ」

「ああ……確かにあんたじゃ無理そうね、いいわ私に任せて」

「すまん」

よし、これで朝から考えてた計画成功だ。結果的には意外な形だったけど。

それに、鈴が俺以外の人に慣れるいいチャンスだ。鈴には悪いがここは咲と二人で行ってきてもらおう。

俺はその間晩飯の買い物にでも行ってくるかな。

「そういうわけで鈴、行って来い」

「ふえっ！？ 俊二さん来てくれないんですか？」

「ああ、俺はちよつと用事があるからな」

「そんな……」

「まあ、そんな落ち込むなって。すぐ会えるし」

「で、お金とかはどうするのよ？」

「ああ、それは俺が出す。お前に出してもらおうわけにはいかないからな」

「ただ……服が無いから買い物に行く為の服を貸してやってくれ」

「仕方ないわね……それじゃ鈴ちゃん。一度私の家に行きましょ」

「おう頼んだ。じゃあ鈴、また後でな」

「はい……」

これが今生の別れかと言わんばかりの雰囲気を漂わせ鈴は咲と共に行った。

まあこれも経験だ鈴。強くなって帰ってこい。

んじゃ、俺もちやちやつと買い物済ませるかな。

＊＊

「ふつつ、これぐらいでいいか」

晩飯の買い物終了。今は人気の少ない公園で休憩中。

俺って何故か人気の少ない所を好むんだよな。何でだろ？

まあ、そんなことはどうでもいい。それより、今日は鈴が来て初めての夕食だからな。

豪勢にしようとして少し買いすぎてしまった。まあ、咲も呼べばいいか。

夕は……まあ咲との相談次第だな。

ちなみに一人暮らししてるのでそこそこの料理は出来たりする。そんなに凝ったものは作れないけど。

鈴たちは……もう終わったのか？ 咲にメールしてみるか。携帯をポケットから取り出しメールの作成画面を開く。

『もう、買い物終わったか？ 終わったら俺ん家来てくれ。晩飯こ馳走する』

こんなもんでいいか、送信と。

携帯を閉じポケットに無造作に放り込む。

さて、じゃあ帰って準備でもするか、そう思い歩き出そうとした途端

待て、青柳俊二

後ろから忘れたくても忘れられない声が耳に響いた。

「お前……銀か！」

いつ襲われてもいいように身構える。しかし、目の前に現れた銀は手ぶらだった。

「だから待てって言ってんだろが、バカが。別に今日は戦いに来たわけじゃねえよ」

「俺としては今すぐにでもお前を血祭りに上げたいがな」

相変わらず頭の中が物騒なやつだ。ただ、戦いに来たわけじゃないのか。

俺としても今から戦うのは厳しかったからちよつどよかった。

「じゃあ、何の用だよ」

「警告だ」

「警告？」

「一度だけ言う。耳の穴かっばじってよく聞け。聞けなかったら…
…殺す」

おいおい、そりゃないだろ……。と思いつつもこいつなら本当にやりかねないので黙って聞くことにする。

「お前とあのガキはこれからも俺たちに狙われ続ける。何処に逃げようとな」

「ただし、お前があのガキから離れるってんならお前は今なら助かる。どうする？」

警告って言うぐらいだからどんな恐ろしい事を言い出すかと思えばそんなこと、考えなくても答えは決まってる。

「俺は逃げないし、あいつからも離れない」

「いいんだな？」

「ああ」

「そうかい、まあ俺としてはその方がお前を殺せるからいいけどな」
「せいぜい、俺に殺されるまでは生き延びるよ、じゃあな」

そういつて颯爽と姿を消す銀。あいつこれだけの為にわざわざ会いに来たのか。

案外律儀な奴だな。まあ物騒なことには変わりないけど。

この事、鈴には黙っておこう。あいつを怖がらせることになりかねないからな。

）

おっ、メールが帰って来たみたいだな。どれどれ。

『今、終わった。これから、そっち行くから』

おっと、俺も急いで帰らないと。待たせたら怒られそうだからな。
鈴がどんな風に変身してるか楽しみだな。

「おお！？ どちらさま？」

家に帰りついて扉を開けると、見知らぬ美少女が中にいた。
純白のワンピースに眼深く被ったお嬢様が被ってるような帽子。
とても綺麗な、空色の髪を下ろして腰まで届くほどのロングにしている。

それが雪のように白い柔肌と相まって本当のお嬢様みたいだ。

ただ、恥ずかしいのか服の裾をぎゅっと掴んでいる。
むしろその仕草がとて愛らしい。守ってあげたくなる感じだ。
でもマジで誰だ？ 俺にこんな可愛い知り合いいたっけか？

「えっ……あの……えっと……」

「ちょっと俊二、あんたそれ本気で言ってるの？」

「お、咲か。いや本気も何もマジで知らないんだが……」

「……えっ？……」

「本当に？」

「ああ、絶対だ。神に誓う」

「はあ……あんたは本当に……」

「……うっ、うっ……ひっく……」

「え？ え？ ちょっと待て、何で泣いてんの！？」

いきなり謎の美少女が目の前で泣きだす。

見た所、我慢の限界が来てしまったらしい。我慢していた分、滝のように涙が瞳から零れ落ちる。

しかし、少女が泣くような事を一切した覚えがない俺は右往左往と慌てることしか出来ない。

「えっと何かよくわからんけど俺が原因なら謝る！ ゴメン！」

こういう時はとりあえず謝っておくのが吉だ。何か誰かが言った気がする。

「ホントに……ホントに分からないんですか？」

「いや……そう言われても……」

分からないものは分からないからな……

「これでも……ですか？」

そういうと少女は深く被っていた帽子を脱いだ。
帽子を脱いだ時に髪の毛のいい香りが漂ってくる……って！

「うえっ！？ 鈴！？」

嘘だろ……まったく気付かなかった。すごくよく出来たドッキリに引っかけた気分になる。

なるほど……道理で急に泣き出すわけだ。俺に気付いてもらえなかつたからか。

「普通すぐに気付くでしょ！ あんただんだけ鈍感なのよ！」

「やっと、気付いてくれたんですね……よかったです……私、このまま気付いてもらえないのかと思って……」

「せっかく鈴ちゃんが頑張ってオシャレしたつてのにあんたは救いようのないバカね……」

「いや！ 少し言い訳をさせてくれ！」

「わかってます……私なんて、結局オシャレなんかしたつて……」

「違う！ 違うぞ鈴！ お前は凄く可愛かった！ うん、認める！」

このまま行くと鈴が鬱になりかねない空気を醸し出していたため急いでフォローに入る。

つて言ってもさっき言った事は全部本音なんだけどな。まあ恥ずかしいから言わないけど。

「嘘です！」

「ホントだつて。可愛いよ鈴」

「ホントのホントですか……？」

「ああ、ホントのホントだ」

「……そうですね！ よかったです！」

ふう……なんとか、鈴も落ち着いてくれたか……。悪気がなかった
とはいえ鈴には悪いことしたな。

さて、お次は魔王こと咲さんのお説教タイムですかね。

こっちは鈴みたいに単純にはいかないぞ。咲は怒ると聞く耳持たないからな……

それとさっきから指を鳴らす音が聞こえてくるのは何でだ。暴力はやめろ、暴力は。

「俊二」

「な、なんだ？」

やばい、声が優しい！ というよりいつもと明らかに喋り方が違うんですけど。

俺の本能が激しく告げてくるここから逃げろ。うん、俺も出来る事なら全力で逃げたいよ。

「これからどうなるか……分かるわよね？」

「いやーちよつと分かんないかな……」

「そう、だったら……私が直接体に分からせてあげるわ」

「えっ！ ちよっ！ 待てっ！ ……ぐはっ！」

これからはよく人を見てから話しかけよう。これ家の家訓にしよう
と思った。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n7008y/>

DOLLS ~ ドールズ ~

2011年12月1日23時54分発行